

# ちよつといし話

## ～甘露～

範宴は比叡山で厳しい修行をしたが悟りを得る事ができなかった。それで、山を下り、京都の六角堂に身を寄せ、修行を続けた。95日目の明け方、聖徳太子が夢の中に現れ、進むべき道を示されました。夢に随い、直ぐ範宴は法然上人の下に駆けつけました。時は1201年、場所は吉水の草庵、現在の東山です。法然上人69歳、範宴29歳でした。範宴とは後の親鸞です。親鸞にとって法然上人との出会いが人生の転機になりました。法然上人は親鸞を弟子にしたのです。親鸞はその感激を「歎異抄」のなかで「法然上人にだまされ、念佛をした爲に地獄に堕ちたとしても、決して後悔いたしません」と終生、法然上人の教えを貫きました。親鸞をして、そこまで言わした法然上人の姿は応に、地獄で仏に会うが如し、一機一縁であったと思われます。この両祖師の法事が2011年に厳修されます。娑婆の付き合いは短いものです。法然上人と親鸞も6～7年の交流で法難により法然は四国へ、親鸞は越後へ流されたのです。西方、阿弥陀仏、称名念佛を通しての絆はあったものの、その後二人は此の世で会う事は無かったのです。人間のegoismで各宗祖の教えも正しく伝わって無い様に思われ

ます。必要なのは諸悪莫作、衆善奉行です。物事を正しく受け止め、子孫に正しく伝えましょう。佛の教えは如何なる事々も善に導く方法を教示すものです。譬えば、毒は毒を以って制す事が出来る様に、又、反対に良薬も服用を間違えれば毒になってしまう様に、言い換えれば苦楽は共に存在していると云うことです。事々物々全て良き方向に向ける事が出来れば是、即ち甘露なり。

偈に洗心甘露水とあります。甘露とは悟りであり、煩惱を癒す事でもあります。彼岸法要で僧が称える経に五如来があります。其の中に甘露王如来と出てきます。甘露王如来とは阿弥陀仏の事なのです。即ち、洗心甘露水とは阿弥陀様の心水で私の醜い心を洗って下さいとお願いする事なのです。十数年前の、お四国巡錫にて、或る札所で空海大師様より「阿弥陀様等の佛様に朝、自分用にコップ一杯のお水を余分に供え、薬指にて供えた水を眉間に付けて心身の快樂を祈念し洗心甘露水と称え、残りのお水も加持水とし、飲み干して下さい」と教えて頂きました。健康食品等、健康ばやりの現代です。昔の事を思い出して、現代病を一考してほしいものです。金で買える健康のウチは良いですが貧すれば鈍する、金で買えなくなる健康を心配しております。念が通じる様に甘露水の作法をして、空海大師様の言われる様に、健康な心身を培って下さい。甘露 甘露

善入院油掛地藏尊